

細黄色、凌冬不凋、子如釘長三四分、紫色、中有庵大如山、茶萸者、俗呼爲母丁香、李時珍曰、漢鬱林郡即今廣西貴州潯柳邕賓諸州之地、一統志惟載柳州羅城縣出鬱金香、即此也、金光明經謂之茶矩、麝香、此乃鬱金香、與今時所用鬱金根、名同物異、

〔倭名類聚抄^{十二}〕薰陸香 兼名苑云、薰陸香俗音出中天竺也、

〔箋注倭名類聚抄^六〕按、本草蘇敬注、薰陸香形似白膠、出天竺、單于二國、嘉祐引南方草木狀云、

出大秦、在海邊、自有大樹生於沙中、盛夏樹膠流出沙上、夷人採取之、賣與賈人、注、南方異物志同、其異者惟云狀如桃膠、

〔長秋記〕大治四年三月廿二日庚子、候院間、忠盛以薰陸一裹來云、是誠物歟、將非歟、仰事云々、予師時源

申云、近來號白膠香者、歟、雖似薰陸、其香淺、稱膠香、薰陸也、稱白膠香、非薰陸歟、但未分其真偽云々、

〔倭名類聚抄^{十二}〕牛頭香 兼名苑云、牛頭香俗音出大秦國、氣似麝香、

〔箋注倭名類聚抄^六〕海藥本草云、沈香當以水試、乃知子細云々、似牛頭者爲牛頭香、

〔源氏物語東屋〕經などをよみてくどくのすぐれたることあめるにも、かのかうばしきをやむことなきことに、佛のの給置けるもことわりなりや、やくわうぼんなどにも、とりわきての給まへ

る、ごづせんだんとかや、おどろくしきもの、名なれど、まづかの殿○のちかくふるまひたまへば、佛はまことし給けりとこそおほゆれ、

〔倭名類聚抄^{十二}〕雞舌香 南州異物志云、雞舌香是草花之可含香、

〔箋注倭名類聚抄^六〕按、雞舌香即丁香、此分爲二、似非、然嘉祐本草亦二物並舉之、夢溪筆談

云、予集靈苑方論、雞舌香以爲丁香母、蓋出陳氏拾遺、今細考之、尙未然、齊民要術云、雞舌香、世以其

似丁香、故一名丁香香、即今丁香是也、日華子云、雞舌香治口氣、所以三省故事、郎官口含雞舌香、欲

其奏事對答其氣芬芳、此正謂丁香治口氣、至今方書爲然、又古方五香連翹湯用雞舌香、千金五香